

もっとアマチュア天文学を盛り上げるために

長谷川 均 (月惑星研究会)

〈(株)アステック 〒162 東京都新宿区南町6 BR市ヶ谷〉

天文学という分野は他の自然科学分野と違って、今でも多くのアマチュア研究者たちが新天体の発見や観測という分野で活躍している。そして、最近では研究方面にも進出するようになってきた。著者自身もそういった趣味としての天文学の研究を行っていて、その面白さに熱中している。その経験の中から、今以上にアマチュア天文学を発展させるにはどうしたらよいかについて感じたことをこの短期連載の一つとしてまとめてみたい。

もっと天文学科を

まず、最初に感じることは、現在大学に天文学の学科があまりに少な過ぎる。さらにその天文学科は受験戦争の最終到達目標かそれに近い大学にしか存在しない。物理や化学とかの学科になるとそこいらへんの大学にもちゃんとあるのになぜか天文学だけはない。一般の天文雑誌などで天文学に興味を持った少年少女たちが、さてもっと深く勉強しようと思ったところに受験戦争の壁が立ちだかって彼らあるいは彼女らの夢をつぶしてしまっている。著者自身も子供のころから星に興味を持って、将来は天文学者になりたいなどと思っていたころもあった。しかし、勉強の得意でなかった著者も、いつしかそういう夢はしぼんでしまった。同じような経験をもつアマチュアは多いはずだ。しかし、それでも天文が好きなことには違いなく、結局今でも様々な制約を受けながらも趣味として研究を続けている。

天文学の教室が増えることによって、たとえば天文学を職業としなくとも、一時でも天文を学んだアマチュアが各地に散在するだけで意識は高まる

Hitoshi Hasegawa : Toward the Promotion of Amateur Astronomy

ことと思う。大学で天文学を学んだ者が教師になったり、各地でアマチュア活動のリーダーとなればもっと趣味の天文学者も増えていくことだろうし、レベルも上がることだろう。さらに天文を職業としようとしている立場の人たちには就職のチャンスが増えてハッピーエンドであろう。これを書いている途中で、森本雅樹先生の“ピンボケ望遠鏡がんばる”というエッセー集を読んだ。同じように全国の大学に天文学科を、という話が出ていたのを読んで、全く同感の思いであった。天文学科が増えることはアマチュアとしても大歓迎である。

また、天文学科とまでいかななくても、最近各地に作られている公立天文台や科学館などで、もっと天文学を修めた人が指導者として採用されるようになってもいいのではないかと思う。最近こうした天文台が関西方面にいくつか作られているのを関東の人間から見ると羨ましい限りである。メーカー提供の自動プラネタリウムを見せるだけの科学館ばかりではちょっと情けない。

アマチュアが天文研究をするには

さて、天文学科をもっと増やして欲しいところであるが、そうすぐには増えないだろうし、家庭

を抱えてしまった現在、筆者としてはもう一度大学に入る余裕などない。そこで、働きながらも趣味としての天文学研究がもっとスムーズに行えるような環境が欲しい。

我々天文アマチュアが研究活動をするうえで最も必要となるのが文献である。運良く天文の研究できる大学に入れた者は研究室の指導教官から技術的なことから世渡りについてまで多くを学ぶことができるだろう。一方アマチュアは、全てを文献から学ばなければならない。論文の入手経路が絶たれしまったらおそらくアマチュア天文研究は絶滅してしまうだろう。ところが、前述のように天文学科が非常に少ないためにこれらの文献を入手する機会が少ない。著者は最初、国立国会図書館で文献を探した。しかし、そこには何でも揃っているが、閉架式の図書館でかつ手続きも面倒で目当ての文献を捜し当てるのは忍耐を要する。最近では土曜日が休館となってしまっ、週休2日の土曜休みを利用することができなくなってしまった。それで次に利用したのは、東京大学の天文及び地球物理の図書室である。これらの図書室では事情を話したところ、とてもこころよく親切に対応してくれて多くの文献を調査することができた。そして紆余曲折の後、現在では国立天文台の図書室を利用させていただいている。その天文台も土曜閉庁のあおりを受けて利用しづらくなってきた。入手には苦勞するものの、最新の論文に触れられるということは独学で研究する身にとってよい刺激である。入手した論文を仲間と輪講したりして議論を交わすのはとっても楽しいことである。

ところで、著者はたまたま東京に住んでいるために地理的に近いこういった施設を利用することができるが、地方にいととなかなかこういった機会に恵まれない。そのためにも少なくとも地方国立大学には天文学科があり、アマチュアが簡単に図書室を利用できるようになると嬉しい。大学以外に最近各地に建設された公立の天文台でもメジ

ャーなジャーナル程度は揃えてもらって自由に利用できると思う。現在のところこれら施設の利用は、天文台あるいは大学に勤務する研究者の善意によって支えられているのが実状であり、一般に開放するには至っていない。それを実現するにはまたいくつかの問題をクリアする必要があるだろう。当面は、次に示すようにアマチュアに理解を示す天文学者を見つけなければならない。

遠い世界の天文学者

アマチュアに足りないのはなんと言っても指導者だろう。文献をたよりに研究活動を進めるが、一般的な研究のノウハウに乏しい。この違いは大きい。学会発表やら論文作成などは身近に経験者がいるといないとでは雲泥の差だ。そして、どうやって指導者と知り合うかが難しい。著者自身も、いわゆる天文学者と呼ばれる人たちと接することができたのは、つい最近のことである。アマチュアには憧れの的の国立天文台の敷居は、我々にとってプロが思っているよりもはるかに高いものであり、天文学者は極めて近寄り難い存在なのである。それでも最初のきっかけさえつかめれば後はスムーズに行くことは多いようだ。

天文学者とアマチュアとの距離が開いてしまった原因としては、天文学があまりに進歩してしまって、アマチュアとプロのやっている研究分野の違いがあまりに大きくなってしまったことがあげられる。筆者は主に惑星や彗星などの太陽系天体の観測や理論などを中心に活動している。太陽系を含めてアマチュアが関わっている分野はみな自前の望遠鏡で観測できる対象が中心である。しかし、そういった分野から最先端の天文学研究ができるかといとなかなか難しい状況になってきた。そのため次第に交流が少なくなっているのが残念である。筆者の関わっている太陽系天体の分野の天文学的研究は日本ではあまり行われていないが、アメリカ天文学会には惑星科学分科会のようなものがちゃんとあってかなり活発に活動してい

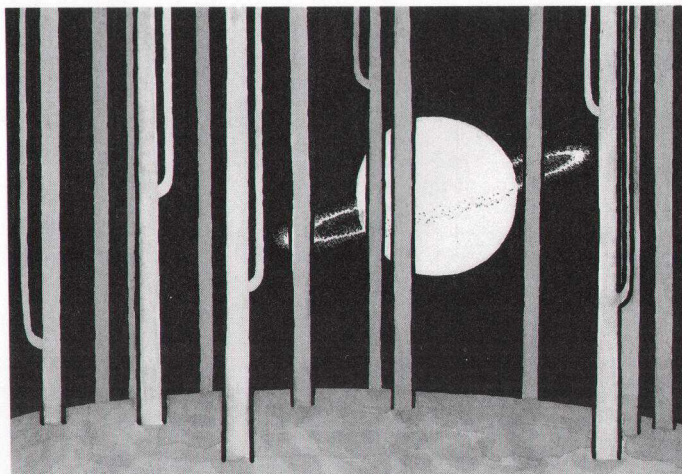
る（惑星科学分科会だけで日本の天文学会並の年会発表がある）。もう少しこの分野の研究者が増えてくれれば交流のチャンスも増えるのではないかと期待する。天文学会の他に、最近、日本惑星科学会も結成されたので心強く思っている。

アマチュア側からも近付こう

こういったプロとアマチュアの交流する機会が減っている現状を多少でも補う意味でも、アマチュア側からのアプローチも積極的にすべきだろう。春秋の年会などにも近県で行われたらなるべく出席の方がよいだろう。職業天文学者がどんなことに感心を持っているかを知ることができる。そして、中には自分たちにもできそうな研究を発表しているプロや、同じアマチュアの仲間が発表している姿を見れば自分もやってみようという気になるかもしれない。さらに、もっと小規模

な研究会、シンポジウム、あるいはもっとローカルな天文台や大学などで行われる談話会などは頻繁に行われている。これらの研究会の方が話も詳しく聞くことができるし、休憩時間でのコミュニケーションも取りやすいだろう。ただ、残念ながらこういった催しは現状では内部の者にしかわからない。時間的な制約もあるかもしれないが、天文月報などで積極的にこうした情報を流してもらえるとありがたい。

以上、思いつくままに今のアマチュア活動の発展のために感じたことを述べてきた。これらの他にアマチュアグループによる各種研究会活動についても書きたかったのだが、どうやら紙面が尽きてしまったので、また別の機会があったらということにしたい。プロの先生方のみなさん、どうか今後もアマチュアの活動を暖かく見守って下さい。



ふしぎの星の森

(和歌山県 小北純子)